

半 一之編著

『青海民族史入門』

本書は『中国民族史入門叢書』中の第一冊である。その前言に依れば、この叢書は、中国民族史に興味を有し、これの研究に志す人を読者の対象とするもので、その意図するところは、読者の中国民族史の学習力の向上をはかるとともに、専門的テーマの研究に進むための指針を示すことにある。従って本叢書は中国民族史の研究入門書といふべきものである。

『中国民族史入門叢書』は体裁上、各民族史と地区民族史に応じて分冊にして編纂されるが、各冊には原則として三つの部門、即ち歴史概説、史料簡介、研究綜述が設けられる。それらにおいては各民族或いは各地区の民族の歴史の歩みやその特徴、専門的テーマの研究を進めるために必要な基本史料、各当該領域での研究の成果と問題点等が述べられることになっている。

本叢書の編纂事業は故翁独健教授の懇切

な指導の下に開始され、国内の多数の民族史学者の熱烈な支持協力を受けて進められているものである。この故に本叢書こそは事実上現代の中国民族史学者の教学経験と研究成果の集大成という形になるであろう、と言う。

さて、青海省は古くから多民族居住地区であった。ここには早くも先秦時期から西戎とか羌戎が住み、漢代には小月氏と匈奴も住牧した。西晋時代に入ると鮮卑族が東辺部に大量に移住し、小王国を建てたものもあった。南北朝時代には青海湖周辺に吐谷渾王国が存在したが、唐初に吐蕃に滅ぼされた。こうした諸民族も当然青海古代民族史の研究範囲であるが、それらについては本叢書中別に専門書が予定されているので、本書では現在青海省に居住している藏族、蒙古族、土族、撒拉族、回族の歴史が専ら対象とされている。一九八五年の統計に依ると、青海省の人口は約四〇七万。その中、これら五つの民族が一五九万で、三九・四％を占め、漢族が二四七万で、六〇・四％を占めている。

本書第一編は歴史概説であり、青海藏族史要、青海蒙古族史要、土族史要、撒拉族

史要、青海回族史要の各節に分けられている。各節共に民族の来源から説き起こし、宋代ないし元代から、明代、清代、民国時代まで順を追って歴史を概説している。いずれの民族史においても社会経済史に目配りがよく利いているのは美点である。例えば土族史においては、牧畜業生産から農業生産への転化過程を史料に基づいて詳しく述べ、水利灌溉設備や農産物も具体的に挙げている。

撒拉族史と回族史にあつては清代にイスラム教の教派争いが深刻化し、これが度々反清武装闘争に転化した。こうした方面の叙述は特に詳細である。全体として第一編は限られた紙数にもかかわらず内容が豊かで、しかもそれらが必要にして十分な典拠で裏付けられている。本編は青海民族史の信頼できる通史として、初学者のみならず専門家にも推奨できるものである。

第二編は史料簡介である。ここでは青海藏族史基本史料、青海蒙古族史基本史料、土族史基本史料、撒拉族史基本史料、青海回族史基本史料、の各節に分けられている。取り上げられている史料は漢文史料のみならず、蒙古文、藏文、撒拉文史料もあり、

すこぶるよく網羅されている。特に漢文史料にあっては、官方文献、編年史籍、紀伝体史籍、私家著述、方志及び社会調査等に分けられて、ひとときわ懇切丁寧に説明されている。これらの問題を介して読者に新しい研究課題へのヒントをつかんでもらおうとする著者の熱意が十分に感じ取れる。

史料の中には専門家にも馴染のないものも見られる。例えば、佑寧寺活仏三世土觀・羅桑却吉尼瑪の著作『塔爾寺志』(本書は Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyima, 10 vols, New Delhi, 1969-71. には未著録)、拉卜楞寺活仏智貢巴・貢却丹巴繞傑の著作『西寧東科爾寺与東科爾呼圖克圖』、土族の重要史料たる『民和李氏宗譜』(民和檔案館に存す)や『遼東祁氏宗譜』(青森省図書館に存す)その他の譜系類、撒拉語手抄本の『雑学本本』、等々の如きである。こうした類の他に、海外では入手困難な内部印行本も相当数挙げられている。この故に第二編はひとり初学者のみならず、専門家にもまことに有益である。ただ読者のためには少数民族語史料に対しては書名、著者名のローマ字綴りを併記して欲しかったと思う。なお、若干の史料については

刊本の説明が不十分なものも物足りない。例えば、『安多政教史』について刊本に全く言及がないが、これには Lokesh Chandra ed., *The Ocean Annals of Amdo*, 3 vols, New Delhi, 1975-77. や『安多政教史』(甘肅民族出版社、一九八二年)その他がある。松巴・益西班覺著『青海史』には楊和璿漢文訳注本があるとのみ言うが、これは英文訳注本(Ho-Chin Yang, *The Annals of Kokonor, Bloomington, 1969*)ではないのか。『年羹堯奏折專集』とは台北刊本(『年羹堯奏摺專輯』三卷、國立故宮博物院、一九七一年)と別物なのだろうか。初学者が史料を実際に手にするために、史料の具体的に正確な出版情報が不可欠である。こうした情報提供は多ければ多いほど良いのである。

本書第三編は研究綜述と題し、青海藏族史、青海蒙古族史、土族史、撒拉族史、青海回族史の各方面に互る新中国成立以後の研究概況である。ここでは中国国内の各種刊行物に登載された論文のみを対象とされている。従って外国人の研究は中国語に翻訳されたもの以外は取り上げられていない(但し日本語の論文は若干扱われている)。本書の如き高度な研究入門書としてはやはり國

外での研究概況への配慮も望みたいところである。

論文はテーマごとに整理され、論点がよく分かるように示されている。一例を挙げると、青海蒙古族史上の河南親王の研究については次の如く記される。

和碩特前首旗河南親王察罕丹津の一派は二百余年にわたり隆盛を続けて衰えず、該地は解放後、//河南蒙古族自治県//を設けたが、青海蒙古諸部中特殊な地位にあった。『河南蒙古族自治県概況』(一九八五年出版)に專章があつて論述されている外、なお以下の数篇の專文がある。曲又新「蒙古和碩特部在青海黃河南前首旗親王世系述略」(『青海民族學院學報』一九八四年第一期)と「拉卜楞寺之根本檀越黃河南蒙古親王概況」(『甘肅民族研究』一九八三年第三期)は、前者は専らその世系と襲位情況及び王府組織を述べ、後者は遠祖近祖から説き起こし、併せて清廷との關係、王位承襲及び王府組織と轄地等の情況を論述している。辛建平の「河南蒙古親王与拉卜楞寺院」(『青海地方志研究』一九八四年第二期)の一文は拉卜楞寺の

創建、発展を論述の重点としたものである(一七九頁)。

本編においても固有名詞は漢字でのみ表記されているが、これはやはり改善の余地があろう。例えば、青海藏族史上の西納氏一族について、西納則寛や西納貝本の如き人名の原語を即座に答えることのできる初学者は決して多くあるまい。Zi na Ritse 'jo, Zi na Dpal 'bum とローマ字表記を併記して欲しいものである。なお、欧文の文献についても、原題と原載誌名を示すべきである。

第三編はまさしく中国歴史学界の回顧と展望とも言うべきものである。ここには中国歴史学界が過去に挙げた夥しい研究業績と将来へ向けての研究課題が具体的に提示されている。国外の青海民族史研究者としても本編の内容を知悉しておかなければならない。その意味で本書は世界中の青海民族史研究者の座右の書となるであろう。

本書は本書を皮切りに第一期分として、今後『満族史入門』、『渤海史入門』、『甘肅民族史入門』、『吐谷渾史入門』、『衛拉特蒙古史入門』の刊行が予定されている。それ

らの順調な上梓を切に祈るものである。

(新書版 二五九頁 一九八七年八月
青海人民出版社 一・六〇元)
(若松 寛 京都府立大学文学部教授)

新宿区教育委員会編

『新宿区地図集——地図で見る

新宿区の移り変わり——』

『地図で見る新宿区の移り
変わり』(全五冊)

本成果は、新宿区に関わる絵図・地図を整理・編集した地図集である。資料として区立中央図書館が収集した郷土資料・行政資料の地図類を中心に、国立国会図書館などの所蔵する地図類が使用されている。

前者『新宿区地図集』(二〇五頁、図版二八点)は後者五冊に先立ち、昭和五四年に出版された。新宿区全体を表現する絵図・地図を収めている。これらの絵図・地図は時代別に、I. 江戸時代、II. 明治初年から関東大震災まで、III. 関東大震災から太平洋戦争まで、IV. 太平洋戦争後、の四期に整理・分類されている。続いて各絵図

・地図に関する解説が成されている。巻末には、新宿区関係の地図目録(江戸時代以降)が付され、本書に収められなかった絵図・地図の存在を知ることができる。

後者『地図で見る新宿区の移り変わり』は区内各地域に関する地図集で、五冊より成る。すなわち牛込編(昭和五七年発行、五〇三頁、図版一〇二点)、四谷編(昭和五八年、六一五頁、図版一五五点)、淀橋・大久保編(昭和五九年、四八〇頁、図版一〇六点)、戸塚・落合編(昭和六〇年、五四九頁、図版一五五点)、そして索引編(昭和六二年、一〇八八頁)の五冊である。

まず索引編以外の四冊は、それぞれ区内各地域の地図及び解説で構成される。地図に関して、近世の切絵図・町絵図・村絵図や近代の区全図(四谷区・牛込区)など一般図だけでなく、近代の地籍図・土地宝典など主題図も時代順に幅広く収めている。次に解説に関しては、所収地図の解説だけでなく、当該地域の「町とくらし」についての論文・エッセイを四五編(牛込編九、四谷編一二、淀橋・大久保編一二、戸塚・落合編一二)収めており、これらの地図集を興味深いものとしている。たとえば、福